

自宅の放射線測定は自らの手で！ いわき市でモニタリング講習会を開催

2016年2月6日(土)午後1時より約1時間半にわたって、いわき市平下山口字大沢のいわき市第10仮設住宅第一集会所で「線量計の使い方説明・実習の会—自宅の線量、自分で測りましょう—」を開きました。参加者は地元の方12名と原発行動隊からの安藤理事長、伊藤理事、事務局員麻生良二でした。

最初に榎葉町役場の担当者より、榎葉町の希望者に第三者の立場で個人住宅のモニタリングを行っているという原発行動隊の紹介がありました。

次いでパワーポイントを使って以下のような説明が行われました。

- ・このモニタリングで測ろうとしているものはセシウムCs-137、セシウムCs-134に由来するγ線です。β線は測定対象ではありません。
- ・放射線の強さを表す値にはベクレル(Bq)、吸収線量(Gy)、線量等量(Sv)があります。
- ・モニタリングポストが示す空間線量の値(空気吸収線量に対応:Gy単位)とサーベイメーターの示す空間線量の値(1cm周辺線量等量に対応:Sv単位)の間には、およそモニタリングポスト線量=0.8xサーベイメーター線量の関係があります。
- ・放射線の「個人の確率的影響(がん、遺伝的影響)」に及ぼす指標として、ひばく限度に適用される実効線量(Sv)の値に

は、およそ実効線量=0.8xサーベイメーター線量の関係があります。

参考として、私たち原発行動隊が榎葉町で2014-2015年に行った個人住宅モニタリングの結果の概要を伝えました。

次いで町が年間を通じて住民一世帯に一台貸し出している富士電機のシリコン半導体型γ線サーベイメーターDOSEeの使い方を実物を用いて実習しました。

さらに希望者には、町役場で短期日貸し出しているアロカのγ線サーベイメーターALOKA TCS-172についても実習しました。実習と並行して参加者との質疑が行われました。

・問い「このメーターで示す値がいくつなら子供や孫に榎葉の家に来て大丈夫といえますか」。

・答え「私ならこの値ぐらいなら大丈夫と考える、しかし皆さんにこれなら大丈夫と保証することはできません」。

自分で測れば自宅のどの部屋の線量が低いか分かるので、なるべく線量の低いところで過ごすことができるという説明はもちろんされました。

・参加者のなかには「環境省の作業者が自分の思うようには測ってくれない」と訴えて、それゆえで自分で測ってみたいという人もいました。

榎葉町役場の担当者は、この会の開催を仮設住宅の住民に知らせるのに骨を折ったり、DOSEeおよびTCS-172を集会所に届けたりと、協力的でした。(伊藤邦夫)



●第48回SVCF院内集会●

原発労働者が語るイチエフの内情「原発事故収束労働の適切な国家管理を」

1月21日(木)、48回目の院内集会を参議院議員会館B104会議室にて開催した。参加者は約25名。今回のテーマは「元イチエフ作業員からの報告」。講師は池田実さん。

池田さんは今63歳。2013年に長年勤めた都内の郵便局を定年退職したあと、第二の働き口を福島原発事故の収束に関わる現場作業に求めたのは、原発による電力を享受してきた東京在住者としての贖罪意識があったから。

ハローワークで仕事を探したけれど、福島第一原発内の作業に60歳以上の募集がなく、ひとまず年齢不問の除染作業に雇われ、浪江町で働いた。この仕事が早期に終わって雇い止めになった後、再びハローワークで求職すると、今度はフクイチ内の仕事が見つかった。雇い主は3次下請けの会社。

働いたのは2014年8月から翌年4月末までの9ヵ月。仕事は高線量下で放置された諸施設の「可燃物等の分別と回収」。紙、木、衣類(膨大な使い捨て防護服を圧縮した固まりを焼却炉の投入口のサイズに合わせてほぐす作業)など、要するに燃えるゴミの片づけだが、これを防護服に全面マスクの重武装で行なう。

1日の被曝許容量は0.8ミリシーベルト。しかるべき労働条



件や安全管理のタテマエはあるものの、下請け作業ではそれが曖昧になり、言わば治外法権状態になってしまうのを実感した池田さんは、原発事故収束労働の適切な国家管理の必要性を強調した。

質疑応答では約10名の出席者から質問があった。被曝管理、労働環境、そしてSVCF特有の関心事たる高齢者労働に関する質問が殆どで、それに対して池田さんは観たこと感じたことを、反原発派が聞きたがる「都市伝説」を排し、きわめて具体的に、委曲を尽くして答えて下さった。事故現場で働くことを志向する団体にふさわしい報告と問答だった。(平井吉夫)

みんなでこれからを考える

「ポジティブカフェ2016」参加報告

除染情報プラザ(福島県・環境省)主催の上記集会に参加しました。

日時:2016年2月11日13時-16時30分、場所:JR福島駅西口のクラッセふくしま4F多目的ホールでした。

この集まりは、福島第一原発事故の影響を受けた地域で活動するボランティアグループおよび商工会や青年会議所の情報・意見交換会です。参加団体は10、参加者数はおおよそ200人でした。「ポジティブカフェ」がこれまで行った集会の紹介、参加団体の昨年の活動報告の後、“みんなでこれからを考える”をテーマに意見交換が行われました。

参加団体の活動の課題は、1)地域の過疎化を食い止めて再活性化するには何をすべきか、2)この中で放射能汚染の影響にどう対処すべきか、に絞られます。

1)については地域ごとにやれることはいろいろあると感じら

れました。2)の本質は人々の安心感の違いにあるので直接的な対処法はないと感じられました。私は会場から、よその人が観光滞在にせよ移住にせよ問題の地域に来るようになる仕掛けを考えることを提案しました。“皆で住めば怖くない”以外に安心感への対処法はないように感じられませんでした。(伊藤邦夫)



<第49回院内集会のご案内>

■日時:2月25日(木) 11:00-13:00(10:30から玄関ロビーで入館証配布)

■会場:参議院議員会館(B103会議室)

■内容:事故から5年を迎えようとしているイチエフは、現在もまだ汚染水問題はもとより、燃料デブリや使用済み燃料の取出し問題、さらには施設構内外の放射性物質や放射線汚染物質の処理等の見通しが無いままに、月日が経過しています。今回は、イチエフの現場で事故収束の最前線で指揮をとる原子力損害賠償・廃炉等支援機構および東京電力株式会社福島第一原発廃炉推進カンパニーの関係部署からご登壇いただき、現在の状況や直面している問題、さらには今後の方針についてお話しいただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。